

体験的な活動を通して、自分の考えを表現し合う児童の育成
-青い目の人形を中心とした地域素材による「ふるさと学習」の取り組み-

高度学校教育実践専攻
教職実践力高度化コース
海老名 三智子

実習責任教員 西村 公孝
実習指導教員 村川 雅弘

キーワード: 体験的な活動、ふるさと学習、青い目の人形

1 実習校の課題と研究課題設定の理由

実習校は、児童数90名の山間へき地小規模校である。地域にある豊富な素材を活かして、総合的な学習の時間を中心に、体験的に学ぶふるさと学習を行っている。しかし、内容が単発であったり、行事のための調べ学習であったりすることが学校アセスメントから明らかになった。学習指導要領解説では、総合的な学習の時間の授業づくりのポイントとして「問題解決的な活動が発展的に繰り返される探究的な学習」

「他者と協同して課題を解決する協同的な学習」「体験活動の重視」「思考力・判断力・表現力等を育む言語活動の充実」をあげており、これらを意識した計画の見直しと改善が必要である。また、「指示待ちである」「自分の考えを言葉で表現することが苦手」という児童の課題を解決するため、総合的な学習の時間を中心に、地域の「ひと・もの・こと」から体験的に学ぶ学習を通して、ふるさとに誇りをもち、自分の考えを表現し合う児童を育てたいと考えた。同時に、地域教材を扱うカリキュラムの見直しを図る中で、学校の宝物として大切にされている「青い目の人形（アリス人形）」の教材としての価値を見直し継承していきたいと考え、本研究テーマを設定した。

2 先行研究及び実践研究の分析

(1) ふるさと学習

西村(2016)は、今、なぜふるさと学習が重

視され取り上げられるのかについて、「日本人の在り方や生き方を問う心の課題としてふるさとが再認識されている」としている。結論として、「宗教観念が薄れ、身近な両親すら尊敬できない心を喪失した生活者が、唯一頼れるものが心のふるさととしての生まれ故郷の原風景であろう。」と述べている。幼少期から、豊かな自然の中で地域の人と関わりながら、その環境にひたる、環境について学ぶといった体系的な学びを提供することは、子どもの心の中にふるさとを育てることであり、今後の生きる力を支える重要なことだと言える。

(2) 青い目の人形

1920年代に移民問題を中心として日本とアメリカの関係が悪化する中、一人の宣教師が中心となって全米から約13000体の人形が「友情と平和の使者」として贈られ、全国の小学校や幼稚園に配られた。しかし、戦争が激しくなるにつれて、その人形は敵国のスパイとして扱われ多くの人形が処分されてしまった。アリス人形は、当時勤めていた阿部ミツエ先生によって、物置に隠され難を逃れたと伝えられている。現在全国に残っている人形は約300体と言われている。愛知県に残っている人形保存校を訪ねて聞き取りを行い、実践の参考とした。

3 実践研究の計画 3つの仮説と手立て

体験的に学ぶふるさと学習の充実と児童の探

究的な学習をねらいとし、3つの仮説と手立てを考えた(図1参照)。1つ目は、「地域を体験的に学ぶ」とし、教員の地域理解研修と体験活動のサポートを行った。2つ目は、5年生の総合的な学習の時間に、担任と共に「地域を探究的に学ぶ」単元の設定を行い、探究的な学習のプロセス(図2)を基にT・Tとして実践した。3つ目は、「地域教材の開発『青い目の人形』の活用」である。全国の人形保存小学校を対象に、人形を活用した教育活動についてアンケート調査を行うとともに、アリスカレンダーを作成し、アリス人形を教材とした授業を提案した。

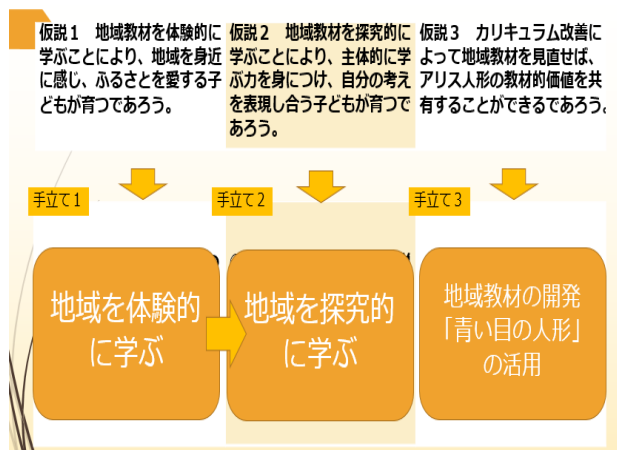


図1 3つの仮説と手立て

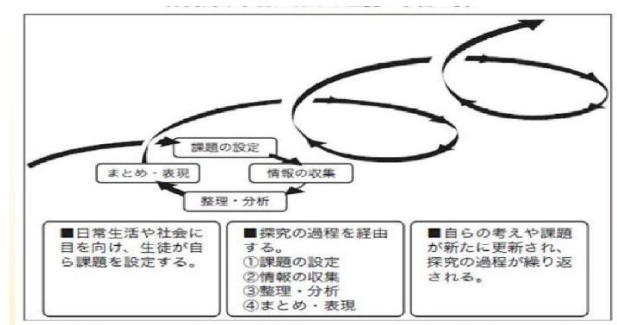


図2 探究的な学習のプロセス

4 学校課題フィールドワーク I・IIにおける実践研究

学校課題フィールドワーク I・IIでは、具体的に次のことに取り組んだ(図3)。

時期	手立て1	手立て2	手立て3
2~3月	○総合的な学習の時間の年間計画の見直しワークショップ型研修の実施		○青い目の人形を活用した教育活動の全国調査 ○人形保存小学校の訪問
FW I 4~6月	○地域教材を体験的に学ぶ単元の設定 ○地域の紹介・地域理解(春休み) ○ふるさとマップの見直し(春休み) ○地域フィールドワーク研修の実施	○5年生の年間計画の見直しと単元の設定 ○話し合いのための思考ツールの活用	○地域の高齢者からの聞き取り(4.18) ○人形保存小学校の訪問(5.6) ○資料の収集
FW II 9~10月	○体験活動の実施	○地域の人材活用	○アリスカレンダーの作成 ○人形を教材とした授業の実施

図3 学校課題フィールドワーク実践内容

(1)手立て1 地域を体験的に学ぶ

年度末に生活・総合の年間計画の見直しワークショップ型研修を行ったところ、教員が地域を知らないことが分かった。地域での学習を行うためには、まず教員が地域を知ることが必要であると考え、地域理解のための研修を実施した。また、体験学習や外部講師による授業の立案や引率等、ふるさと学習のサポートを行った。サポートにあたり「活動のめあてを明らかにすること」「地域と担任の関係をつなぐこと」「準備等の担任の負担感を減らすこと」を心がけた。

(2)手立て2 地域を探究的に学ぶ

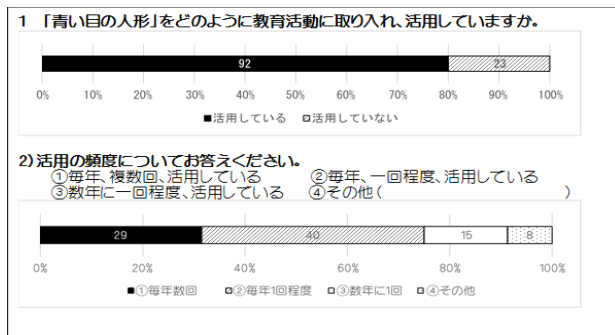
年間計画と児童の興味・関心をもとに、単元「神山の自然をマモルンジャー」を設定した。探究的な学習のプロセスを意識し、課題の設定と情報の収集では、体験活動を重視した。それぞれの体験が単発的なものにならないよう相談しながらすすめ、活動後には振り返りの時間を持ち、感想やお礼の手紙として記録をとりためていった。自分の考えを表現するための手立てとして、KJ法やクラゲチャート等の思考スキルを活用した。

(3)手立て3 地域教材の開発「青い目の人形」の活用

青い目の人形保存小学校(158校)にアン

ケート調査を実施し、115校の回答を得た。保存小学校の約80%（92校）で青い目の人形が教育活動において活用されていることが分かった(グラフ1)。

グラフ1 人形活用の状況



また、具体的な主な活用事例、活用の際の問題点についても明らかにすることができた。(表5)

表5 青い目の人形の具体的な活用事例と活用の際の問題点

具体的な活用事例	活用が難しい、問題点
<ul style="list-style-type: none"> ○総合的な学習の時間 ○6年生社会科での平和学習 ○学校長による講話・学校だより ○集会や行事 	<ul style="list-style-type: none"> ○人形の老朽化・文化的価値 ○教員の移動、興味・関心 ○他の教育課題との関係等 ○資料不足

実習校のアリス人形についても、地域教材としての価値を整理し、平和学習や保存校との交流など、様々に関連・発展させることができる優れた教材であることが確認できた。

そこで、アリス人形を教材とした授業を年間計画に位置づけるため、アリスカレンダーを作成した(図4)。



図4 アリスカレンダー

そして、3年生と6年生の道徳で、人形を活用した授業の提案をした。6年生では今まで当たり前に「学校の宝物」としてきたアリス人形を、「どうしてアリスちゃんは、学校の宝物なのだろう。」と問い直すことによって、人形の価値について深く考えることができた(図5)。

	地域・アリス人形	平和と友好・青い目の人形
ものとしての価値	<ul style="list-style-type: none"> ○1つしかないアリスちゃんだから。 ○神山町の宝物だから ○徳島県に唯一残っている人形だから。 	<ul style="list-style-type: none"> ○アメリカからの平和と友好の使者だから ○様々な苦難を乗り越えてきた人形だから。 ○もう2度と戦争がおこらないように思わせてくれる(もの)だから。
人の思いや行動に関する価値	<ul style="list-style-type: none"> ○阿部先生が命がけで守りぬいたから。 ○今まで大切に守られてきたから。 	<ul style="list-style-type: none"> ○平和を祈って贈られた人形だから。 ○戦争のことを伝えていかないといけないから。

図5 6年生が考えたアリス人形の価値

5 実践研究の成果と課題

(1) 手立て1について

今年度は地域に初めて赴任した教員が多かったため、FWIで地域を知る研修を実施した。そのことにより、教員が地域に関心を持ち、魅力や課題を感じることで児童と共に地域に出かける機会も増えた。その結果、児童の地域への愛着が高まった。また、地域の学校への期待も大きく、森づくりや食育を通じた地域と連携する取り組みが進められるに従って、児童が地域の人と関わる機会も増えた。教師や友達以外の人とのコミュニケーションを図る場となり「感謝する」「地域が好きになる」機会も恵まれてきている。地域を体験的に学ばせることは、ふるさとを愛する子どもを育てるために重要であると言える。これからも地域に積極的に協力を求め連携して取り組んでいきたい。一方、課題として、連続した時間の確保があげられる。活動に追われてしまい、じっくりと取り組み試行錯誤するゆとりがなくなっている場面も見られ

た。また、教員も打ち合わせから活動後のまとめまでさらに多忙になっている。新しいものを取り入れていくためには、今までのものを見直し廃止したり融合したりするなどの見直しが必要である。今後地域と学校をつなぐ地域コーディネーターも必要だと思われた。

（２）手立て２について

「課題の設定」「情報の収集」での体験活動を関連づけて継続して行ったことにより、学習意欲を持続させることができた。テーマにそった一連の学習活動により、今まで以上に鮎喰川を身近に感じ、守っていきたいという気持ちを高めることができた。川遊びや生き物観察の活動後は、五感を通した感想から会話が弾んでいる様子が見られた。教室では、思考ツールを用いたことで、同じ意見でも自分の考えを発表することができたり、話すことが苦手な児童も考えを整理して伝えることができたりし、効果的だった。しかし、「整理・分析」の話し合いの場面では積極的に話し合う姿があまり見られなかった。話し合いのスキルやまとめ方など指導の積み重ねが影響していると考えられる。自分の考えを伝え合う児童の育成のためには、他教科でも言語活動を意識して取り組むことが必要である。また、今回の実践では、担任と話し合いながら進めていったにもかかわらず、学校行事や他の活動も多くなり時間に追われる結果となった。特に高学年の計画はゆとりをもたせることも重要であることが分かった。

（３）手立て３について

今回の実践では、カリキュラムの改善には至らなかった。しかし、青い目の人形を活用した教育活動の全国調査からは、平和学習や国際交流の優れた教材として活用できると明らかにすることができた。また、アンケートによって保

存校が自校の人形について見直すきっかけを提供することもできた。実習校のアリス人形は地域教材としても平和教材としても優れていると実証することができた。さらに、人形を活用した提案実践により、アリス人形をこれからも大切にしていこうとする児童の心情を高めることができ、教材としての価値を見直すことができたと言える。今後継続していくためには、他の教員にも負担なく取り組んでもらう必要がある。使いやすい提示資料の工夫や学校に保管されている資料の整理が十分とは言えないので、機会をとらえ協働して行いたいと考える。また、他県の人形を保存している学校とも情報交換を行い、「青い目の人形」を活用した優れた授業実践ができるよう取り組んでいきたい。

６ 実践研究課題の振り返りと今後の展望

今回の実践を通して、改めて地域が豊かな環境にあり、様々な体験を通した学びができることを実感した。今後、教職員全体で児童につけたい力を共有し、様々に行われている体験活動を見直し、6年間のカリキュラムに位置づけていけるよう取り組んでいきたい。そして、ふるさと学習が「地域で学ぶ」「地域を学ぶ」ことから、そこで生活する人々の働き方・生き方から学ぶ、地域から世界を考えるといった（「地域から学ぶ」）充実したものとなるよう、今後も総合的な学習の時間を中心にふるさと学習に取り組みたい。そして、ふるさとを誇りに思い、自分の考えを伝え合いながらたくましく生きる児童の育成をめざしたい。

【引用・参考文献】

○西村公孝（2015）「ふるさと学習を中心とした地域文化」○文部科学省（平成20年）『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』○文部科学省（平成22年）「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」